

## 研究報告

# デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方

## Interpersonal Relationships of Patients with Mental Disorders Attending the A Psychiatric Day Care Service Center

苅谷美来 (Miku Kariya)\*  
大上未稀 (Miki Oue)\*\*  
濱田衿菜 (Erina Hamada)\*\*  
田井雅子 (Masako Tai)\*\*\*\*\*

伊東凌佑 (Ryosuke Itou)\*\*  
堤万理郁 (Marika Tsutsumi)\*\*\*\*  
森本美穂 (Miho Morimoto)\*\*\*\*  
榎本香 (Kaori Makimoto)\*\*\*\*\*

### 要 約

デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方を明らかにすることを目的に、精神疾患をもつ人6名を対象に半構成的面接を行い、質的帰納的方法で分析をした。その結果、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方として、【相手と無理せず気楽に付き合う】【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出し、人とかかわる】【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】【自分の状態や思いをわかって欲しいので、伝え方の工夫をする】の5つのテーマが導かれた。これらのテーマより、精神疾患をもつ人は、対人関係に苦手意識をもちながらも、対人関係をもち続ける中でその人なりの意味を見出しており、対人関係をもとうとする根底の思いには、人とのかかわり欲求があることが考えられた。

キーワード：精神疾患をもつ人 対人関係のもち方 デイケア利用者

### I. はじめに

近年、精神医療の動向としては、「入院医療中心から地域生活中心へ」と、地域で精神疾患をもつ人をケアしていこうという流れが作られている。地域で生活していくためには人とのかかわりが必要不可欠である。精神疾患をもつ人は、一般的に対人関係の技術が未熟で、感情表現も乏しく、自己評価も低いことから意思決定や選択が難しく、人間関係を築き保っていくことは患者にとって大変困難になる<sup>1)</sup>。また、精神疾患による症状の影響で、他者と交流を避けることや、人に対して攻撃的になったり被害的になったりすることもある。さらに精神疾患の症状に対する周囲の理解の仕方によっては、周囲の人にも精神疾患をもつ人との距離をとる。そのため、当事者の反応と周囲の人の理解や態度が相互に影響し、対人関係を築きにくくしている<sup>2)-4)</sup>。対人関係を築けないことで、孤独や被

害感を生み、病気に悪影響を及ぼし、対人関係を一層困難にするという悪循環に陥ってしまう。このことから、看護者として精神疾患をもつ人が対人関係を築く際の支援が重要であるといえる。

対人関係とは、人間関係の中に含まれる個人間の心理的な結びつきのことであり、相互作用に基づくものである<sup>5)6)</sup>。この相互作用は、認知、感情、反応、接触という互いの相手に対する働きかけによって生じる。精神疾患をもつ人はこれらの相互作用をうまく行うことが困難であり、対人関係の築きにくさを生じる。しかし、「彼らの根底には、人との関わり欲求があり、その対人関係を支えるための支援が必要である」と成田ら<sup>7)</sup>は述べており、精神疾患をもつ人の関わり欲求を満たすためにも対人関係の支援が必要であるといえる。

精神科デイケアは他の社会復帰施設に比べ多くの利用者があり、対人交流範囲の拡大を図る場、また種々のグループ活動を通じて円滑な対

\*高知大学医学部附属病院  
\*\*\*\*\*元横浜市立大学附属病院

\*\*井之頭病院  
\*\*\*\*\*高知県立大学看護学部

\*\*\*徳島大学病院

\*\*\*\*岡山市立市民病院

人交流、社会化、自主性を獲得する場であり、地域移行における重要な受け皿の機能を果たしている<sup>8)9)</sup>。デイケアはプログラムを通して対人的機能を高める支援を行い、精神疾患をもつ人が地域生活において必要不可欠な人とのつながりを築いていけるようにしており、対人関係への支援が重要であることがわかる。

既存の研究では、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の課題や支援ニーズに関する報告はあるものの、精神疾患をもつ人自身の対人関係の持ち方に焦点をあてた研究はなかった。そこで本研究では、対人関係に困難さを抱える精神疾患をもつ人の地域生活における生きづらさを軽減し、対人関係を円滑にする支援への示唆を得るために、対人交流や社会性の習得を促すデイケアを利用する精神疾患をもつ人に焦点を当て、対人関係の持ち方を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究目的

本研究の目的は、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係の持ち方を明らかにすることである。

## III. 用語の定義

本研究では、精神疾患をもつ人の対人関係の持ち方を、個人と個人の間で相互作用しているもので、その中には認知・感情・行動が含まれていると定義した。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン：質的帰納的研究

2. 参加者：以下の2点の条件を満たすものとする。

- ①精神疾患をもち、精神科デイケアに通所している方
- ②言語によるコミュニケーションが可能で、デイケアスタッフや家族、日頃よくかわりのある人との対人関係の持ち方に対する自分の思いや体験を語るができる方

3. データ収集方法：半構成的インタビューガイドを用いて、参加者1名につき研究者2名で面接を行った。事前に参加者と関わる機会を設け心理的な負担が最小限となるように配慮した。参加者には日頃よく付き合う人を思い浮かべてもらい、その人とどんな付き合いがあるか、付き合いの中で困ることや工夫していることなどを質問した。インタビューの内容は、事前に参加者の同意と研究協力施設の承諾を得て録音し、メモをとった。

4. データ収集期間：2014年8月～9月上旬

5. 分析方法：ケース像を参加者ごとに作成し、研究メンバーで参加者に対する共通理解を深めた。インタビューの録音内容を逐語録として起こし、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係の持ち方を表している部分を抽出し、参加者の語った言葉を大切にしながらケースごとに内容をまとめ、すべてのケースを比較してテーマを導き出した。

6. 倫理的配慮：本研究は高知県立大学看護研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得た。さらに研究協力施設の承諾を得た。参加者に対しては、研究の目的、研究方法、研究の協力は自由意思であること、撤回が可能であること、個人の匿名性に配慮すること、研究結果を学内や外部で公表する可能性があることについて、文書と口頭で説明を行い、同意書への署名により参加の意思を確認した。

## V. 結果

### 1. 参加者の概要

参加者は、男性が4名、女性が2名であり、その年齢は20代が1名、30代が4名、50代が1名であった。診断名は、統合失調症が5名、広汎性発達障害が1名であった。デイケア利用を継続している期間は9カ月～4年程度であった。

## 2. デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方

分析の結果、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方として、【相手と無理せず気楽に付き合う】【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】

【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出し、人とかかわる】【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】【自分の状態や思いをわかって欲しいので、伝え方の工夫をする】の5つのテーマが導かれた。

以下、テーマは【 】, サブテーマは〈 〉、参加者の語りは「 / 」で示す。

### 1) 【相手と無理せず気楽に付き合う】

【相手と無理せず気楽に付き合う】とは、相手に対して気を遣いすぎたり、緊張したりせずに、相手と安心して接していることや、自分の思いや状態を隠すことなく相手に伝えることで、無理をせず付き合っていることである。このテーマには、〈相手と気楽に楽しく付き合う〉〈安心していられる人とは自分の気持ちや状態を隠すことなく、自然体で付き合える〉の2つのサブテーマが含まれる。

Aさんは精神疾患をもつ親しい友人とは「まあ、日頃のこととか、体重のお互いの話して、何キロ減ったとか、そういう話をしています。」と語り、相手に対して気を遣いすぎたり、緊張したりせず、他愛のない話をし、〈相手と気楽に楽しく付き合(う)〉っていた。

またBさんは、デイケア内の友人について、「わりと安心して接せられる人達ですね。相手していても和やかに話できる感じしますね」と語り、お互いに深く踏み込まない関係を保つことで安心して接することができ、〈安心していられる人とは自分の気持ちや状態を隠すことなく、自然体で付き合(える)〉っていた。

### 2) 【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】

【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】とは、相手からの自分に対する心配や配慮、相手の辛さを感じ取り、相手を気遣う行動をとることである。また自分と

相手との思いが異なる時は、相手のことを考え、自分の気持ちに折り合いをつけたり、お互いに不快な気持ちにならないように、自分の行動を変え周囲と付き合っていくことを示す。このテーマには〈相手の言動やそれに伴った自分への思いを読み取り、折り合いをつける〉〈お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手に迷惑や負担をかけないように行動する〉〈相手にとって精神疾患は無縁の世界であるため、病気のことは伝えない〉〈相手との関係や反応を気にし、それに合わせて行動する〉〈お互いの気持ちを考え、争いごとを避けるために、相手を刺激しないように行動する〉の5つのサブテーマが含まれる。

Fさんは、以前は母親に自分の気持ちをわかってもらえないと思っていたが「いろいろ話し合っ  
て、母親もつらかったんだっていうのがすごく見えたんですよ。それで納得したっていうか、(中略)向こうの方が大変だったんだっていうのがありますけど。」と語り、話を重ねたことで〈相手の言動やそれに伴った自分への思いを読み取り、折り合いをつけ(る)〉ていた。

Cさんは、「しんどい時は、会わずに家にこもってます。マイナス思考のこととかいっぱいでてくるので、それを聞くのが嫌いな人なので、気分を悪くさせたくないから、言いたくないから、関わらないようにしてます。」と語り、自分がしんどいときや弱音を吐きそうな時は、〈お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手に迷惑や負担をかけないように行動(する)〉していた。

またEさんは、健常者の友人との付き合いについて「なんて言うんでしょう、なんか無縁の世界じゃないですか、まあそうじゃないかもしれないですけど、まあ、いっかみみたいな、あんまり深く考えたことはないですね。」や「友達の場合は、だましだましという感じですね。その精神的な病気のこととか、体調悪くなくても分らないと思って。」と語り、〈相手にとって精神疾患は無縁の世界であるため、病気のことは伝えない〉ようにしていた。

### 3) 【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出し、人とかかわる】

【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出

し、人とかかわる】とは、人とかかわることが苦手でも、その人なりに対人関係について考え、自分にとっての対人関係の必要性や意味を見出し、人とかかわろうとしていることを示す。このテーマには、〈精神症状を落ち着かせるために、積極的に人とかかわる〉〈対人関係が苦手であっても、自分なりの意味を見出すことで人とかかわろうとしている〉の2つのサブテーマが含まれる。

Dさんは「車掌さんにあいさつ、おはようございますーって言ったり、今日もよろしくお願ひしますーって言うたりすることがあって、すごい話す人は、あのそれ以上のことをコミュニケーションとれるんですけど、あまりとれない人もなんかこういうおばちゃんがいるっていうのを流れたのか、それでも会釈ぐらいはしてくれるようになって、初めはえって感じだったけど、なんか、楽しいですね、電車は。」と語り、社会の中で人と関わることで楽しく過ごすことができおり〈精神症状を落ち着かせるために、積極的に人とかかわ(る)〉っていた。

また、基本的には人とかかわりたくないと思っているCさんは「できれば、人と関わりたくないんですけど、でも、絶対かかわらないといけないし、なんかそれで救われることもあるし、だから、大切にしたいです」と語り、〈対人関係が苦手であっても、自分なりの意味を見出すことで人とかかわろうとして(いる)〉いた。

#### 4) 【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】

【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】は、自分の発言が相手に影響することを気にして、プライベートなことには深入りしないことや、自分の感情をコントロールするために距離を置くことを示す。このテーマには〈自分がかかわることで、相手の状況が悪くなることを気にして、深入りしない〉〈お互いのプライベートなことには踏み込まない〉〈自分の身を守るために距離を置く〉〈相手に対して抱いた不快な感情をコントロールするために距離を置く〉〈自分のことを理解してくれていないと感じる時は、相手との距離を置く〉の5つのサブテーマが含まれる。

Aさんは、精神疾患のことを知らない人にきついことを言われたときは、「あーそうですかっていう感じで、まあ、受け流すっていう感じですかね。距離も置いています。」と語り、〈自分の身を守るために距離を置(く)〉っていた。

Fさんは自分に余裕がない時は、「部屋にこもるか、外に出るかして、まあ1回頭を冷やさないけどそんな感じで。」と語り、〈相手に対して抱いた不快な感情をコントロールするために距離を置(く)〉っていた。

またCさんは、自分の気持ちをわかってくれなさそうな人には、「わかってもらえると思ってないので。言わないです、だいたい、はいはいって聞いて聞き流すって感じが、そういう風になっています。やっぱり、自分のストレスになるし、向こうも聞きたくないだろうし。」と語り、ストレスな状況を回避するために〈自分のことを理解してくれていないと感じる時は、相手との距離を置(く)〉っていた。

#### 5) 【自分の状態や思いをわかってほしいので、伝え方の工夫をする】

【自分の状態や思いをわかってほしいので、伝え方の工夫をする】とは、相手に自分の思いや状態をわかってほしいときに、一方的に伝えるのではなく、相手の状況や気持ちに配慮しつつ伝えることや、自分の意思が相手にうまく伝えられない時には、他者の力を借りて伝えたり、伝える方法を工夫していることを表す。このテーマには、〈相手の状況や気持ちに配慮しつつ、自分の思いや状態を伝える〉〈自分の気持ちをわかってほしいので、伝える努力をする〉〈自分のことを理解してくれている人の力を借り、自分の意思や考えを伝えてもらう〉の3つのサブテーマが含まれる。

Aさんは「言ってもわかってくれない時があるんで、そこをこう噛み砕いて、一つ一つ言って。」と語り、相手が自分の気持ちをわかってくれない時も自分なりに伝える工夫をし、〈自分の気持ちをわかってほしいので、伝える努力を(する)〉していた。

また、Fさんは感情的になり意思伝達がうまくいかない時は、「そういう時はちょっと父親に介入してもらって」と語っており、〈自分の

ことを理解してくれている人の力を借り、自分の意思や考えを伝えてもら（う）っていた。

## VI. 考 察

本研究結果で明らかになったテーマの特徴について、対人関係における相手との距離のとり方、自分を理解してほしいという欲求、無理をしないで付き合うこと、対人関係に肯定的な意味を見出すという4つの視点から考察する。

### 1. お互いの思いを大切にしながら相手との距離を調節する

【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】 【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】 より、参加者はお互いのことを考えて、相手との距離を調節したり、相手を気遣い尊重したかかわりをするという、自分と相手を大事にする対人関係のもち方をしている特徴がみられた。

山口ら<sup>10)</sup>は、精神障害者は人と接するのが苦手で、人との距離を保てない等、障害があることで良好な人間関係を築くのに時間がかかる傾向にあると述べている。また村井ら<sup>11)</sup>は統合失調症における認知機能の低下や情動的表情認知（他者の表情からその人の感情を読み取る）など社会認知の障害が社会場面での困難に影響していると述べている。一方、丸山ら<sup>12)</sup>の研究では、精神障害者の対人関係は表面的に気さくで浅い対話ではあるが、人の態度、心の向きを観察し、対人関係にうまく対処している人もいることが明らかにされている。本研究においても、参加者は人との付き合いに対する苦手意識や、社会認知の障害により相手の様子や状態を判断することへの困難さをもちつつも、自分なりに状況判断を行い、相手に対して迷惑をかけないように配慮したり、自分がかかわることで相手の状況が悪くなることを気にして深入りしないようにすることで対人関係を保とうとしていた。また、相手に対して不快な感情を抱いた時や、自分のことを理解されていないと感じ、付き合いが負担となる時は、自分の身を守るために相手と距離を置いていた。このように相手と距離を置くことは、自分を守るだけでなく、相手の

状況をも読み取りながら互いに適度な距離感を保つコツであり、病気や人とうまく付き合う中で習得したものと考えられる。自分と相手のことを考え、距離を調整して人付き合いを維持していくことは、精神疾患をもつ人にとって対人関係を円滑に、そして良好にしていく手段につながっているのではないかと考える。

### 2. 自分のことを理解してほしいので伝える努力をする

【自分の状態や思いをわかってほしいので、伝え方の工夫をする】 より、精神疾患をもつ人は対人関係において自分の思いや症状を相手に伝えるために様々な工夫を行っていることが明らかとなった。

川口ら<sup>13)</sup>の研究では、精神疾患をもつ人が社会に対し自身の病気や障害を理解して欲しいという思いをもっていることが明らかになっている。一方、Linkら<sup>14)15)</sup>によると、精神障害者は一般に、周囲からの差別や拒絶を予期して病気を隠したり、社会から遠ざかったりする防衛策を講じると述べられており、社会の精神疾患に対するスティグマが、精神疾患をもつ人に悪影響を及ぼしている<sup>16)</sup>。さらに寶田ら<sup>17)</sup>は、精神障害者自身にもセルフスティグマがあることも課題であると述べている。参加者の中にも健常者にはわからないからと自分の思いを伝えることを控えたり、一般の人とかかわる際に距離をとる人もいた。これらの反応にはセルフスティグマが影響している可能性がある。そのため、精神疾患をもつ人は理解されたい欲求や伝えたい欲求がありながらも、周囲からの偏見や差別、セルフスティグマにより、自身の病状や思いを他者に伝えることが難しい状況にあると考えられる。

しかし、【自分の状態や思いをわかってほしいので、伝え方の工夫（をする）】をして、伝えるための努力をしていた。そして、自分の思いを十分にわかってもらえない時でも伝えることを諦めず、他者の力を借り、積極的に相手に伝えている。このような自分自身をより理解してもらうための積極的な行動には、他者から理解されている、理解しようとしてくれる存在がいると実感できる体験が必要ではないだろうか。

そのことが対人関係における自信や自己肯定感を高め、さらに人とかかわりをもつ行動を促進すると考える。よって、このような行動や努力を承認し、援助していく必要がある。

### 3. 緊張感なく相手と気楽に付き合う

【相手と無理せず気楽に付き合う】より、親しい相手に限らず、今後の関係を深く考えなくてよい一過性の関係である相手とは、緊張感なく気を遣ったりせずに、共通の話題や他愛のない話をしたりして気楽に付き合っていることがわかった。

三木ら<sup>18)</sup>によると、精神疾患をもつ人同士の付き合いは、気を遣い、あまり活発ではないところで安定し、表面的には気さくで浅い対話の対人関係ではあるが、その内側には仲間意識が存在しており、個々の持ち味を活かしながら自然体でいられるよう、各自が何らかの対処方法を見出し身につけ実践していると述べられている。今回の参加者の中にも、デイケアメンバーとは深入りせずに付き合うと語る者がおり、浅い関係性のもち方のように見える中にも仲間意識がうかがえた。また、特定の相手とだけ付き合うのではなく、その場にいる人と話したり、付き合いが日常的に続いていくような相手ではなく、その場限りの対人関係においては【相手と無理せず気楽に付き合う】ことができていた。このように精神疾患をもつ人は、対人関係において他者との関係を維持していくための工夫をする一方、相手との関係を意識し過ぎない付き合いを大切にしたり、自分のことを包み隠さず話せ、安心感や心地よさを感じられる相手との付き合いを大事にしている。一見浅い付き合い方や関係のもち方にみえるが、そのような関係であるからこそもてる心地よさが、自身の症状や精神面においての安定に繋がって、対人関係をもとうとする行動になっていると考える。

### 4. 対人関係において肯定的な意味を見出し人とかかわる

対人関係に苦手意識があるために、自信をもって人とかかわることができていない参加者もいるものの、【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出し、人とかかわる】のように、参加者

は人とかかわり、人はそれぞれ違うことに気付くことで、対人関係において自分なりの意味を見出して、積極的に人とかかわろうとしていた。また、人とかかわることで救われる体験や、自分に良い影響がある体験、人と繋がり、自分が受け入れられ認められたという体験を通して、周囲に対して肯定的な捉え方ができていた。成田ら<sup>7)</sup>は、精神障害は対人関係の障害であり、自閉と自分の殻に閉じこもる傾向にあるが、彼らの根底には人とかかわり欲求があると述べている。またMaslow<sup>19)</sup>は、人間のある種の欲求というものは、対人関係を通じてのみ充足されるものであり、これらの欲求の満足は、安全や愛、所属感を与えること、自分を価値あるものと感じること、自己尊重などであると述べている。本研究の参加者においても、社会性を養うために挨拶することで集団への帰属欲求を満たすことに繋がったり、自分のことを理解してもらうために行動することで、所属感を得ていた。このような所属に関する欲求が満たされることで、自尊心が高められる。そして、人とかかわりによって自己実現や自尊心のニードを満たすことができると自身でわかるからこそ、対人関係に苦手意識をもちながらも、人とかかわりをもとうとする欲求が生じていると考える。

これらのことから、精神疾患をもつ人は、人とかかわりに苦手意識や否定的な思いをもっていたとしても、彼らの中にはかかわり欲求や所属欲求があり、自分の居場所を求め人とかかわり、自分が認められた体験や受け入れられた体験を積むことで、自分や周囲に対して肯定的な意味を見出し、自分に対する自信や自己評価を高めていると考える。そして、対人関係に対する肯定的な意味が見出されることで、人と関係を築いていくための行動が押し進められ、またそこから肯定感を高めるといった、良いサイクルが生じていると考える。

### 5. 看護援助への示唆

精神疾患をもつ人は対人関係に苦手意識をもち、自分に自信をもてないと感じる一方で、自分の状態や思い、精神疾患について理解してほしいという思いをもち、そのことを伝えようと努力していた。

そのため、精神疾患をもつ人の対人関係のもち方を否定するのではなく、対人関係に苦手意識があり自分に自信をもてないという気持ちを受容しながら、会話に対して肯定的なフィードバックを行い、個別性に配慮しかかわる必要がある。それがその人の対人関係のもち方を伸ばし、自信や自己肯定感を高めることにもつながると考える。

また地域住民の精神疾患をもつ人に対するスティグマを軽減していくことも必要である。それにより、精神疾患をもつ人が地域や社会に受け入れられる、理解してもらえらるという思いをもつことにつながれば、セルフスティグマを軽減することにもなり、対人関係を維持・拡大することができるのではないかと考える。そして、人とかかわり欲求を満たし、他者とのつながりをさらに充実させていくために、精神疾患をもつ人が地域の中でも人とかかわりをもつことを支えることが重要である。そのためには、地域の関係機関とのネットワークを作り、精神疾患をもつ人同士だけでなく、地域住民と精神疾患をもつ人の交流の機会を作っていくことも大切であると考え。つまり精神疾患をもつ人が地域に根ざした生活を行えるような体制を整えていくことが必要であると考え。

## VII. お わ り に

本研究において、デイケアを利用する精神疾患をもつ人の対人関係のもち方には【相手と無理せず気楽に付き合う】【お互いの病状や気持ち、状況を考え、相手を気遣ってかかわる】【対人関係に自分なりの肯定的な意味を見出し、人とかかわる】【お互いが嫌な思いをしないように、距離を置く】【自分の状態や思いをわかって欲しいので、伝え方の工夫をする】の5つのテーマが抽出され、対人関係におけるその人なりの意味を見出しており、対人関係をもとうとする根底の思いには、人とかかわり欲求があることが考えられた。

本研究の参加者は6名であることや、インタビューを行う研究者の力量が未熟であり、研究者が十分に思いを汲み取ることができなかつた、参加者の語る内容を深めて聞くことが難し

く、一般化には限界がある。また、今回は無視をするなどマイナスな行動や防衛機制の働きに関連するテーマは抽出されなかった。それは参加者の語りに焦点を当て、主観的データのみを分析対象としたことによる限界がある。今後は、参加観察での客観的データを含めることや、参加者の人数を増やし、さまざまな疾患の特徴や傾向も捉えながら、対人関係のもち方を明らかにすること、参加者の対人関係における支援に対するニーズについても注目し、研究を継続していく必要がある。

## 謝 辞

本研究にご協力くださいました参加者の皆様、協力施設の皆様に心より感謝申し上げます。なお、本研究は平成26年度高知県立大学看護学部看護研究論文に加筆修正したものである。

## <引用・参考文献>

- 1) 畦地博子：9セルフケア理論を活用しての看護過程、明解看護学双書3精神看護学(第2版)、野嶋佐由美編、p101、金芳堂、2002.
- 2) 畦地博子：“主な疾患とその看護”、明解看護学双書3精神看護学(第2版)、野嶋佐由美編、p176-183、金芳堂、2002.
- 3) 水島広子：対人関係療法でなおす双極性障害 躁うつ病への対人関係・社会リズム療法(第1版)、p44-47、創元社、2010.
- 4) 梶本市子：“問題行動をもつ人の看護”、明解看護学双書3精神看護学(第2版)、野嶋佐由美編、p163-164、金堂、2002.
- 5) 星野命：対人関係の心理学、第1版、p8-13、日本評論社、1998.
- 6) 安東末廣、佐伯榮三：人間関係を学ぶ(第1版)、p10、ナカニシヤ出版、1995.
- 7) 成田優子、松原美智子、岡本隆寛：精神障害者の地域生活における現状と課題(第2報)ー共同作業所利用者へのインタビューよりー、第39回日本看護学会論文集 精神看護、p12-14、2008.
- 8) 日本デイケア学会：精神科デイケアQ&A(第2版)、p16、p18、p20、p72-73、中央法規出版株式会社、2006.

- 9) 島田和佳、早稲田真弓、杉若美智子、山根浩和：感情表現や自己表現の苦手な統合失調症患者にSSTを試みて、第35回日本精神科看護学会誌、p235-237、2004.
- 10) 山口美弥、大石真理子、岡本隆寛：地域生活をおくる精神障害者の社会適応過程に関する要因分析—就労支援B型施設における参加観察を通して—、第41回日本看護学会論文集 地域看護、p7-10、2010.
- 11) 村井俊哉、松河理子、笹本彰彦：統合失調症にみられる社会脳の病態と社会性障害、精神神経学雑誌、114(8)、p915-920、2012.
- 12) 丸山由香、三田優子他：利用者からみた精神障害者小規模作業所の役割と機能について—聞き取り調査から現状分析と今後への期待の検討—、病院・地域精神医学、4(2)、p79-80、1998.
- 13) 川口優子、松田宣子、奥田博子：地域に住む精神障害者の生活と意見、神戸大学医学部保健学科紀要、17、p25-31、2001.
- 14) Link BG, Cullen F, Frank J. et al: The social rejection of former mental patients : understanding why labels matter. American Journal of Sociology, 92, p1461-1500, 1987.
- 15) Link BG, Cullen F, Struening EL. et al: A modified labeling theory approach in the area of the mental disorders : an empirical assessment. American Sociological Review, 54, p400-423, 1989.
- 16) 吉井初美：精神障害者に関するスティグマ要因—先行研究をひもといて—、日本精神保健看護学会誌、18(1)、p140-146、2009.
- 17) 寶田穂：“第8章 入院治療と看護の展開”、系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学②、p66-67、医学書院、2012.
- 18) 三木智津子、川口優子：地域に住む精神障害者の生活と支援、日本精神保健看護学会誌、12(1)、p105-112、2003.
- 19) Maslow A.H.：人間性の心理学（第14版）、p342、学校法人産業能率大学出版部、1983.